

## 十一不二の論理（續）

河野憲善

一遍の念佛は當體一念の念佛であり、當體一念に落居する。端的に當體の念佛とは只今の念佛のことであり、その一念とは今のことである。一遍教學の中心理念がここにあるのにも拘らず、その學解を放擲した捨身度生の生涯の故にか、曲解・譏諷が現に一部にある。この誤認は何が故に一遍と稱したかを考えれば氷解することである。宗祖一遍が主著を遺さなかつたので、その教學が鮮明をかくかに思われるが、二本の行狀繪圖は豊麗な詞書に恵まれ、決して傳記ばかりでなく思想教學は隨所に書かれていたのであつて、二祖法語を待つまでもなく、その淨土思想は明瞭である。

宗旨の起點はどこにあるか。「十一不二頌」の十一不二の論理にあるばかりでなく遊行賦算の旅の起點も實にここにある。そして「六十萬人頌」と「六字無生頌」がともに前頌を敷衍したものであつて、三頌は各々獨立すべきものでなくて、要するに十一不二の解明にほかならず、當體一念における念佛即往生を道破している。ちなみに後二頌は『六條緣起』に

よれば熊野本宮の神告ではなく、新宮においての聖の頌である。一遍が熊野三山を尊崇したことは紛もない事實ではあるが、しかしこの事を過大視するのもその反對も戒めなければならぬ。その廻國の歷程は熊野を本處として放射線狀に傳道されたとは、決していえないからである。佛教の神道化が主眼であつたのではない。姑息な妥協でもない、十一不二の一において、佛身觀が法界身だからである。法界とは衆生界であり、宇宙に遍滿する報身報土が護法の諸天善神を包容するからである。山の三角も、吹く風立つ浪の音も彌陀同體ならざるはないからである。當體一念の視點に立てば、佛教の神道化を企圖してもおおよそ詮ないことではなからうか。山河草木法界身の影向するところであり、この世界觀がなければ「十界依正一遍體」という命題は成立しない、また神祇に接近するのも證空以來傳統でもあつた。依正の内にあるというよりも本地は彌陀であることを肯定した所以は當體の眞實が十界に優越するからである。したがつて神道を指彈するより

もそれを本地の徳に光被したのであり、本願を離れてもより一遍體もない。迎合ではなく法界身の必然の結論である。

十一不二とは十劫正覺と一念往生とが不二ということであり、十劫の昔法藏因位の大願が果遂され、佛は西方淨土の教主として成佛した。條件が充されない限り不取正覺と誓われているから欲生我國の生は遠い過去に完了している。しかるに凡夫は過去にもあつたに違いないが、ほかならぬ私が凡夫であり、今ここに在る。充された條件の内容は衆生の念佛に決定している。六字の當體に過去の決定と只今の決定が不離不即となる。不即が十であり、不離が一であつて十一不二となる。決定往生は十劫の昔にあるとともに只今の念佛にある。昔の決定が今の決定であり、今の決定が昔の決定であつて、今と昔の十一不二となる。本願が過去にあり、念佛が只今ここにあり、満足された與件が過去完了だから、單に不二と斷定するのではなく、一遍はさらに一步深めて大乘時間論にまで透徹する。「凡そ佛法は當體一念の外には談ぜざるなり、故に三世即ち一念なり」と。當體の一念とは一遍においては只今の念佛であるとともに、全佛教は當體一念の身觸實證を提擲している、その一念はまた絶對現在の今に立つものである。一念往生の一念は平凡な今にあるとともに直下承當の只今、具體的現實に位している。一遍の念佛は一聲の一念で永遠の今にある。このことを一遍は三世截斷の名號とも換

言している。名號が自爾の徳として三世を切斷するのであり、妄分の機が三世を能統一するのではない。佛力不捨の故である。他阿が「かぎりのときはいつにても只今にてもや有るべく候」といい、「末は今の一念ばかりにて有るべく候」という。宗旨の大本はここにある。識者の啓蒙を促したい。

「別願の正覺は凡夫の稱名より成じ、衆生の往生は彌陀の正覺に定まり畢んぬ」とある。正覺往生俱時成就の故に衆生稱念の今と本願成就の昔と全く二なしという。今と昔の不二とは十劫の昔の決定が只今の決定であることであり、またそれが「廻心念々生安樂」の念々の一念であり、當體一念の今、永遠の今にある。過去に生きるというも現在を支點として追想しているのであり、未來というも只今から遊離しておれば單なる抽象にすぎない。概念的思惟にはなく、宗教的生命は具體的現實に位する只今ここ以外にありようもない當體の念佛である。衆生の稱念を與件として正覺往生一體の淨土が完成したのであり、衆生の稱念がなければ彌陀は正覺を取らず、後件もすでに過去完了している。西山義にいう俱時成就を承けるものであり、一遍が一遍の念佛というのは、彼にいう即便往生にほかならない。何故か、宗祖二祖はこの語を避けたが、「一聲之間 即證無生」とは即便往生を端的に表明したものであり、即便往生以外に解しようもない。七代託何は隨所に、ことに「託何上人法語」において即便當得一致を説いて

いる。宗祖の三頌を各々獨立に訓詁的に解釋し、あまつさえ託何の著述をこれと遊離して見るから直截簡明な筋の通つた教理信條が支離滅裂となるのである。託何が橋本本阿彌陀佛に與えた書狀に

されば即便當得<sup>へ</sup>一機之始終なり。全非<sup>ク</sup>三機<sup>ニ</sup>、臨終平生は一同也。其一同とは當下の稱名する處なり。有心の方は平生と云れ、稱念の方は臨終と云る<sup>も</sup>也。臨終とて未來に有べきに非ず、當體々々に念佛する處、則臨終平生一同也。恒願一切臨終時と云釋文肝心なり。中略、未來に臨終をのべて沙汰申輩は無道心之至なり。敢<sup>レ</sup>不可<sup>カ</sup>信用<sup>ス</sup>。此理を心得給は<sup>ば</sup>、往生の端的當下稱名之外不可<sup>カ</sup>有<sup>ル</sup>、如此安心決定したらむに何不可なりむや。

往生禮讚の恒願一切臨終時を指示することはすでに一遍の門人傳説にあり、「只今の念佛の外に臨終の念佛なし、臨終即平生なり前念は平生となり。後念は臨終と取なり、故に恒願一切臨終時と云なり。只今念佛の申されぬものが臨終には得申さぬなり、遠く臨終の沙汰をせず能々念佛を申すべきなり」とある。同工異曲と評するよりもむしろ内容に寸分の違いもない。一器瀉瓶に祖典が解釋されているのであつて、それ故にまた、ここに盡されている思想内容は重要であり、祖師の三頌が、もし散文によつて説かれていたならば、この一文でなければならぬ。何が故に只今が臨終であるかという厳しい時間論の徹底なくして、ただ表面的に文字を拾つて一遍法

を解釋すれば由々しい誤に陥るといわなければならぬ。

一念往生といい、一遍法といい、當體の一念という。みな悉く只今の念佛のことであり、六字の中本無生死であり、無上超世の本誓は六字に具現され、佛の慈悲はここをおいてない。六字が絶対の慈悲であり、六字を繰り返すという條件も伴つていなければ、繰り返さなくてもよいという前提もない。いい得ればただ念佛である、「只管念佛」である。六字の名號證を一念に成ずとは要するに一瞬一瞬絶對者と對決しているのであり、この一念一聲がまた、論註八番問答に由來して無後心無間心ともしている。後念の續く餘地がないのは、逼迫した臨終だからではなく、一遍においてはかけ替のない只今だからである。無前無後の一點であり、前後の沙汰すべからざる十一不二の一である。永遠が時間を切る瞬間であり、三世裁斷の今である。それは念々稱名であり、念々臨終であり、念々往生であり、獨立の一念の非連續の連續となる。それは思惟概念の域でもなく、他想が入る餘裕もないから無間心ともいうが、その無後無間の只今は、念々臨終であつて「臨終なし平生なし」と喝破する。臨終の決定猛利は時々剋々の只今にあるのが、全佛教の歸趨であり、佛法は當體一念の外は談じていないと斷定する。寸鐵人を刺す概があるとともに、寸言、その炯眼はむしろ驚くべきものではなからうか。佛教の全容を、この簡結にして勁健な命題で表現し得たことは大

膽というよりもむしろ雄渾であり、かかる命題、全佛教を時間論の視點において要約した、微動だもない確信を寡聞にして他に知らない。

一遍は「名號は法界酬因の功德なれば、法をはなれて行すべき方とどこほるべき處もなし。是を法界身の彌陀とも説き、十方諸佛國盡是法王家とも釋するなり」といい、十方諸佛の國は彌陀の家という。この法王家は、指方立相の教義門に對して實義門であり、本覺法門に通ずる。始本不二の名號といひ、十二不二の論理は始本不二に直結し、正覺と往生、彌陀と衆生、交互に始覺であり、本覺であり、始本が交互に轉入互具するところに始本不二があり、絶対に懸絶するものが、一致するのは日常經驗とは位相を異にする宗教經驗であり、俱時成就は一面十劫の昔であり、また他面は衆生稱念の只今に現成する。當體の一念に、非思量底に、「總じてわが分にいろはず」始本の不離となり、機法一體となる。これを「身心我にあらず」とさえ喝破する。衆生界に遍滿する報身報土であり、「名號酬因の功德に約する時は十界無差別であり」、妄分に約する時は淨穢も各別になるという、後者が教義門であるこというまでもない。機根には九品の差別はあるが同行は一類同伴であり、本願一つに歸すれば法の方より融通して自他の行體一如であるという。本願の光被において、自他不二の倫理となる。法界身中の自と他であり、他力難思に

自他融合の實踐となる。その法界身が當體全是において名號おのれなりの功德において一遍體である。名號は衆生界にあるとともに法界無差別にもある。十界の依正が自他隔歴するところが教義門、平等一相のところが即ち始本の互具が實義門、この二門の相即がまた十二不二でもある。それはどこまでも當體の一念において、法爾として一遍證であり、當體の念佛に實義が存するのであつて一遍證を踊躍證に置換してはならない。「行ずる風情も往生せず、聲の風情も往生せず、身の振舞も往生せず、心のもちやうも往生せず」ただ端的の六字が、念佛即往生であるという。では何が故に一遍は踊躍したか、他力易行の一門は庶民階層の有だからであり、歴史的にも信州伴野における偶發的のことであつた。庶民的型として踊躍があり、末法の世にたとえようのない悦びを味得るのであつて、おどることは當體一念の必然的結果ではない。もしそうであつたならば、念々の稱名、時々尅々の念佛は、寸時の偷安もないから踊ることに暇もないということになる。

1 拙稿、本誌二の一、二五六頁

2 同

3 拙稿、歴史教育一〇の六、六四頁

4 拙稿、本誌九の一、三〇三頁